



西籍概論

四

学文
16
63

□ 13
3082
4 卅



門 018
號 3082
卷 4

西籍慨論講本卷之四

平田先生講談門人及傳聞人等書記

叔趙匡胤ハ後周の王位以奪取て國王と成て是
多宋の太祖といふ二程子朱子の類ひ多く乃學者
の世に出さる宋の代と云ハこ乃趙匡胤ら國号て
ムホの宋乃代と成ても國中始終一統致し多ると
南と夫ハ契丹夏金遼於と云大國ともみ帝と稱
して別小年号を立常ふ所として總ふら既ハ八
代目の徽宗は白九代目乃欽宗と云二人の王ハ金
の國と云て御國南と云蝦夷と云様分國から攻ら

れて擒にせられ見忍ひを國へはれて行りれて爰
に於て宋ハ一旦亡ひて公王り九代年數百六十
七年御國てハ崇徳天皇の大治元年に當ぬ年て公
叔宋の徽宗欽宗二人の王り金の國へはれらきて
國ハ亡ひふもとも又徽宗り九人めの子と位尔
即ちて是より後ハ南宋の代と去て公是れをばはも
くく右の金契丹復杯云國より攻られ一日を
穩むるとふく都と敵に追落はと杯してせ法か
く支人り出て敵河退け良計とれをかと思へ倭人
の云事字聞て其忠臣字殺しなせして夫てもふた

くく九代續いてとくく蒙古と云國乃志か鳥
獸の様にて去て居る國より攻入れ祿亦弒れ亡ひ
て去るはなれは是れ御國てハ後宇多天皇の弘安
二年乃事て公此南宋の代り百五十二年つくま
しぬ叔蒙古と云ハ漢土の東北を西の方はて打
開はぬる大國て則韃靼と入組ていたる國て其内の
一所を鎮し居る鐵木真と云ふ者ハ彼のはしも
強かたはる契丹と始ぬ夏遼金ふと字も亡して帝
と稱し國号と元と改ぬ鐵木真と云ふ五人目の忽必
烈と云ふ時によりくと宋も亡しから中と一統

して元乃世祖と云ふ事なり事て其勢ハ誠に竹
字破了り如く實尔からて此元の世祖程勢ハ猛ら
るハ無儀とて此王々宋を亡ししは時り丁と御
園々ハ後宇多天皇の弘安時分の事なり其傍の大
國とも成るる不し其勢に乗してかしくも御國
字はハにうかしくひたりし奉ん乃志り有て其はハ
龜山天皇乃御代文永六年々お渡々便字奉つてう
かしくひ申さば處り御取上もかしく刺へに其使小来
せり者の首はハに切て仕まはさ程乃事故尔世
祖々か大化に腹成しはる文永十一年と弘安四年

と兩度せを来つてかの神風に吹破らるるは此時
のどてハ大化ハ古道の大意に申しさる通りてハ
叔世祖りか羅國中ハ一統致して王々十代八十年
余國以多もち順宗と云り時に謀及人たひさくし
く起て又各々帝と稱し其内朱元璋や云もの比ひ
に元を亡して國を奪ひ明の大祖と云ハ是り事て
ハ此元世の亡ひは年々御國てハ後村上天皇の正
平二十三年後光嚴天皇の應安元年に何さる年の
事てハ○叔明の大祖ハハ羅國を一統して其死た
後小孫乃朱允炆と云り位につれことと惠帝と云

所り其叔父下朱棣といふ者謀反起して惠帝を
殺し位を奪はれて是より太宗と云ふ永樂と云ふ此王の
年号て此王より十一代目の神宗と云ふ萬曆二
十年と云ふ此御國の文祿元年と云ふ此の秀吉
公の朝鮮に御討ち出されて皆去はる年て此時明
の大夫おち恐色て騒がるとハ翁が取我慨言に記
し置れた通り乃てて○叔此の王も萬曆四十六
年に古くよりこの禽獸といひし死にたり乃韃靼
化國にて奴兒吟といふ者軍を起して明に國へ攻
入て是より致してよりと仇しはる四拾年より

も苦しめらるてちやうと御國の万治二年に此國
の年号永曆十三年と云ふに明ハ孫志が此韃靼に亡
はれ去ははるてて其時鄭成巧と云ふありあつて是
ハ元末明人鄭芝龍と云ふ者り九州肥前の松浦へ来
て御國の女と何ふて出来ぬも乃て夫故り余程
武勇の勝れと者て始先臺灣の國を攻め落し夫と
是れまわと致し明に入て明主の韃靼にせられ
て其程ハ永昌といふ處へ見よかけもかくはれ
る事取立て韃靼と退治せんも致しよふれ共謀ひ
し其事ふらるて死んで此者明へ忠義

子盡し、いふに、つて其恩賞といふして明王を
則ち王の姓を朱氏とせよ、に、して其朱氏、以て
朱成功や名の、して、國姓、爺といふ、是れ、事
ム、此、世、といふ、彼、國、も、其、國、王、の、姓、と、國
姓、といふ、其、國、姓、以、賜、は、る、人、といふ、心、て、か
國人、を、尊、ん、る、國、姓、といつ、とも、乃て、ム、〇、は、多、韃、靼
を、明、乃、世、以、七、して、國、字、一、統、の、し、國、号、を、清、と、申
きて、ム、其、一、統、し、ある、次、れ、王、と、い、聖、祖、を、いふ、余、程
の、器、量、も、乃て、又、此、王、を、年、号、を、康熙、を、い、は、る、に、依
て、俗、小、を、康熙、帝、杯、を、いふ、て、ム、こ、も、よ、て、當、時、の、王

は、て、四、代、今、年、文、化、八、年、辛、未、年、以て、百、五、十、年、も、外
國、も、穩、に、治、は、て、と、り、て、尤、か、羅、國、中、に、在、り、の、り
本、國、の、通、り、に、風、俗、を、改、變、て、服、の、筒、袖、つ、む、る、ハ、古
し、の、二、帝、三、王、四、聖、人、と、古、筆、の、子、孫、も、と、亦、芥、子
坊、主、に、して、去、は、は、は、て、ム、其、内、孔、子、の、子、孫、は、亦、り
進、死、を、と、ま、て、元、の、は、く、て、置、た、る、所、を、今、乃、王、を、ま
へ、の、世、に、孔、子、ハ、聖、人、の、事、を、や、に、も、つ、て、聖、人、の、物
に、凝、滞、せ、ず、と、ム、世、と、た、し、う、つ、る、とも、去、へ、ハ、當、時
の、風、を、う、た、は、る、事、を、孔、子、の、本、意、を、承、ら、ふ、と、云、て
其、子、孫、を、孔、子、乃、廟、に、守、は、て、い、は、る、神、王、の、様、小、句

此て今もたるとこれとも芥子坊主不致しとぞ申事
てム南んと右段に申事通ずが羅國ハ世々相殺し
相奪けて王の統定はらせし其時々強者かし
か弱者不ばはく王とむけて甚以て乱るゝ事て
ムくをきして鳥羽義著りか羅國の様子みんと
思はハいば犬の群聚をり強者弱者
者他強侵せハ強者これと制む故に群大かのつ
を交に伏せ然色せし其勢ひ子に傳ふはれし漢
國の道是尔同しと申ハ實尔尤ふ事て能當つて
たはてムかやう乃國と漢學者流々を死國と心得

ていり不醉さふしてたれハとてか此賤し我國王
とも帝とやの天子しやのと申しはたう乃國と
中華杯と申すハ甚ハ乃こたててムハ色を我鈴
屋翁り馭我慨言と云ふ書字作はて具は論し置
せは七女にをけて夫字本也し於不篤亂々説たり
加ハ阿らくと申はハははをへて御國乃内て物に
記し口にいハ詞も漢土々を乃天竺にしるもへ
外國の王字尊ん天子しやの皇帝ふとくを後
もいふハ紀事てハふてムは様に外國此王共
尊ハ其王共の制度よりけて徒はたハ國此者

此の様有へた事ふれ共御國乃人々多く諸鉞の王
とて天竺の王とて云うかんとて乃事て又夫れ死
ん事杯も萌ふと云ふ事とてこれふとて死ぬとて
はこ身はかりとていふ事又其妻の事はこも
まとりめとりて女て皇后とてやのキサキしやのとハ
いふへはも乃ていふは凡て此外のいひ様も是に
准へてしるゝ宜しいてふは亦くも我々天皇と
北の奉つて外國の王と天子といふもを近とい
くハ戴て則ち天皇多蔑し奉はるや去も乃てふか
のみいわくもしく賤しは漢國をら天に二はの日

ふ戎にふやらへ地に二人の王は形してて他の國
の君はハハはくもとふとむとも有や致はん
夫故かれ三國とて魏蜀吳と三はに別つゝる時
ふとも蜀の劉玄徳に心ひん輩は後世にも蜀は尊
む故下魏ハはさしく漢の次と受ふむれとも天子
といせやはこ其當時に有ても魏の人々蜀天子
といふハ十蜀の人もはこ魏天子として天子といふ
事をさらにふくまはこ北魏南梁の世と申して北は
南と二はにハられてたつゝる時南はてハ北は胡
虜や阿貳とて此よりハみふとてハ島夷や河やし

互に互ひきや賤し然て我方南らぬ王は天子や去
とことんやあはれはさものとゆして天地の間に二
はとれと尊くはしはる天皇と載記奉りなから何
のもしととむれ外國の王子いさくかも尊き云へ
と道理々南にありはせふと夫を儒者杯の心ふへ
例のせむくもろふしれ國にははつて尊記國を
其王と天子と崇むへれ天地の自からふる理の
やうに思はてためといふはさてもくと不辨へな
とてと譬とひまはつと國ふあろ己り國字たとし
てあたし國と尊とむへ己り君ふ忠ふらんとてとる

の君に諂ひ仕へとのり親は捨て人乃親をいけら
やうふ事てと抑わら天皇ははつ堅に申し奉れは
天地は御始を遊らしりる天は神の御子ふはしく
て神代の始免むる萬代の末まで御ゆき通り遊
はして御尊はるところかへかへらせ給ふぬ上を
又横にも天地乃間尔晋々御ゆき通り遊はして御
とよとさの類ひましははぬ理は自から明かすわ
ちてと所ふらる諸越の王ふとハ自らふて狼牙に
貴ににももてふしははけきとも彼らハ實にさや
う尊らふへと謂うやこふ有はせうや皆例の詐事

多以て強て貴けしめて於し、は乃てと申す故
へはつ諸越て其王の事、以て往昔よりいふして天子
と稱へて多う是は、はは甚あらさらぬ証事て、是
を、つらこく考ふは、處、彼盤古氏、左乃目、日と
ふ、右の目、月と為、さう杯いふ類ひの傳へり、訛
て、ふらもあつやう、ふ物て、我天皇乃御事と、天
神の御子と申し奉る稱へり、彼國、既古し、へ、亦も、
れ、く聞へ有て、と、ま、よ、かの國の上古乃王等、何
の辨へも、於く一國を領し、は、るも、乃ハ、天、神、の、子
と、云、為、者、と、非、々、心得して、已り、國語、多、以て、天子

と名告いものと思はれ、て、但しかれ、國帝王世
紀といふものに、神農氏之、母有、蟠、氏、名、登、則、帝、王、之、
稱、天子、自、炎、帝、始、也、と、あるに、な、れ、ハ、か、や、う、に、名、の、
ま、と、な、は、は、神、農、々、と、し、め、て、夫、々、後、の、王、さ、ち、も、
この、か、た、は、は、神、物、ふ、ら、是、ハ、甚、の、僭、稱、と、云、て、漫
ふ、稱、へ、て、ふ、ふ、せ、と、い、ふ、に、我、々、天、皇、の、御、事、と、天
に、神、の、御、子、と、申、す、等、け、ハ、實、に、天、神、の、御、子、に、坐、
ま、り、故、て、ム、サ、れ、と、古、道、の、大、意、に、申、さ、為、通、て、天
津、神、高、皇、產、靈、神、の、御、曾、孫、天、照、大、御、神、ハ、御、孫、に、坐、
は、す、迹、々、岐、命、様、と、云、の、御、國、乃、大、君、と、定、次、御、天、降

し遊ハさほく砌り天照大御神の御言に豊原の
水穗國ハ我御子孫の次くに去ろ次すハ此國む
や仰られて御天降ハし遊し叔爾々岐命様ハ此御
國の大君や御定はり遊もしし故此御國に固
り坐はしとる謂ゆめ國つ神等乃方よとわれ
とを同等に坐ははぬと云の意はもはてと成
て尊ミ奉り天は神ハ御子と申しも乃て
まつ爾々岐命様御天くこと乃段尔々の大國主
神の弟ハ御子事代主神ハ乃御國と御去
てハして御父大國主神ハ此國ハ天は神の御子

に奉り玉ハ仰らまはる猿田彦の神ハ天の八衢
へ御出迎りまきて天は神の御子の天降はると聞
つは故に御前に仕奉らむとして参迎へ侍ふと仰
られはるか字始免として神武天皇の御段ふとに
國は神さち皆々天皇ハ天は神の御子と申し奉ら
れはてふさきそ此御稱ハ於てハわり御代々の天
皇に限つて申せハ御稱へて宛りしハ勿躰ふ
も戎夷の王共杯乃名告わ居へきとてハかいて
外國乃王ともり何以證として天子とや申せり
決して天子とふはさ謂ハれいくハ夫故から

乃古の書物に彼國王多天子や以て記すの慥れ
證とれそ一記傳へし書物も亦や以てはんもし
あるといふ人あらざるのよし有證據此書を見
しうと去けりありやあるは悔しからず
りといふやありまへ尤も遙く後世に出来白は白
虎通といふ書小所以稱天子者何王者又天母地為
之天子也といひ又孝經乃緯書援神契や古もの
ハ天覆地載曰之天子古は古の古之聖人
感天而生子故曰天子也古は春秋繁露も徳侔
天地者皇帝天祐而子之稱天子也と云事と記して

あはけれとも是らハさし理屈の上と小はかし
とさめて我國の王多天子ふと云慥れ證據に
とんとむいそ皆杜撰臆説て少しも取れぬと云
若強て右の白虎通説文援神契と云説文助多て
諸越の王とも天法神の産靈の御靈に云つて成出
じりし乃故に天子杯云ふらハ然らば世の常の人
ハもとより鳥獸草木生とし生はれんへや生る
これまでも盡々に天ハ覆地を載はめものハない
り是らも天子と云てをからう又天子てふい者
ハあやせんとももれて中々以て援神や白虎

通杯尔記しとる趣て云ひざる事と見へる何
と小もハハ天皇の御稱の西戎國に如のく聞へ
ころを盗み去るに相違なく若しさる事て
形けとや杜撰とわふものて當らぬ事て然めに
漢籍尔泥んていさ輩ハ天つ神の御子と申を御稱
ハ西戎國不徳て及んく夫多かの國て盗み得祢ひ
奉けいさ天子と云号れ又く御國へかへて来れば
物心と云事多知らせして却らぬ天は神の御子
と申を御稱天子と書る文字牙設る和訓のや
うに思ふものて夫はいさ本末字辨へぬのた

に依てよく古へて學んで本と心得て置へる事
て然れ小俗の儒者南と一向にかれ多のく尊
と物小いひ思ふハ皆彼國書乃偽言に惑つて其實
からぬと得悟らぬ輩て其上已に國を身免て
人の國を尊むハハはてりの孔子は本意謂ゆる
經書と云物の掟にも背へては事ハ實に孔子
の本意春秋の旨を習ふとからハ御國人ハ諸越の
と子と彼國人ハ他國乃て成たり如くに云ふこと
をよく孔子に習ふことと小物て蓋其内々乃堯
舜禹湯文武と云王ともハ儒者其道乃祖とす

つとよきくけて尊ぶもはる事ふら其心の移は
て其以下の世々此王共たも押形へて尊ぶ又其國
とも中華中國上國ふと云ふを尊む余も亦
かへけて御國多し東夷を尊むといひ於て云ふ
甚も畏く律に御制を以て考へるも此等ハ大及逆
に等しき罪人て然る共今乃御代に在書物乃上
の詞ふや御吟味もかくはして御咎もる故に
儒者ら此んも憚りもれ口に任せ筆不さうせて
かくめ類の狂言共字けへに云ふもしか或も致せ
るといふ抑書といふ物も天下尔弘くはて後乃世は

てし傳るすいふ物なれいかやうの横さは申
せ筆は重に御咎も有様に致しといふものなる古
ハ大宝の御令にもハ羅國ハ蕃國の例に置れて其
使人をも蕃客とあり上ハ必その御令にもそ従ふ
ハ事てハ其を畏ふも恐多し皇朝の御令にて
むいふ彼外國の制に従ひ御國子惡ははに申せし
かふはかんや太しハ罪人ては有まはる儒者も
云てハ羅人ていあやせまいし皇國の人て御國
に居らむはたてはとうして皇朝の御法も背かれ
はせうろむ祿くくし或儒者杯乃常にりの國と尊

んで申せ語以聞習ひ又抄せらる作はの書も見
ししてハ只ぞれ多善を心得て近れふるハ物の
心と知らぬ生し此輩はふから諸越とハいハ
て中國の中華のものと云ハ必しもかの國と
とい心て去ても無き共漢學問をる人ハ彼國以書
計り字朝暮尔讀て居る故尔目も心も夫小なれて
自ら小彼國に王たり我王乃如く親く尊此者に思
を以て萬に正ふ非とら出来く其心からく諸
越はるは主や思ひ何事にもかれの國事ふ漢
とも唐ともいハんで却て御國の事小日本とら

本朝やう去て事と分はも皆非事てハ譬へく學問
外事字云にもからの正學よとハよく學問と云
て御國の古へ字學小ハ却て和學多れ國學の
と云てムホくらう則諸越を主として御國以側に
かしのは去ははて甚以て有はしきとてハ是は
正しくも外國乃と云は形ふ字小やや人乃國の
と云ふははて漢學やうたらんた學と云て此皇
國の古へ字ま形ふれ受はつてよくに學問と云
る本當の事てムからて自分乃國に云はふふと
漢學といはせ又佛學ふともわきらハ受け

佛學と云けれとも法師の徒ハ夫多々く佛學と
身いひはせんヨリヤ尤ふとてム國學と云時ハ尊小
方尔も取成はれるやうとけれとも國乃字と付て
云も事にもはきて猶受はらぬ云状てム世の人乃
物言ははる凡てりやう乃亦やもに内外の差別以
てらる外國の内にし御國字外にしとめ言のこ
り多いのハ漢籍をりてを讀みまはる事してこれ
ハ又屯詩と歌との字去ふとて詩ハ思ふ心と言
ひいけりものふて和歌ハ我國の風俗にて云々杯
とやうにいふとハはつ和歌と云も受くらぬ事

又我國といひ風俗云々ハ皆皇國字狭ム小きム
傍にふしある詞を必そ皇國人の云へ此詞はかひ
の状てハあし其ハもしかやうとて以言くととな
らハ歌を思ふ心字違るわけあり詩も諸越の國歌
自て杯やうにこそ云へ此事てム凡て何事字云に
も此心はへ尔内と外との辨つらな事也や自らを
皇國ハ内て諸越ハ外と依て彼國の事といふに
んとり變けて唐小ハ云く漢の云くしやうにいふ
へ此ものてム皇國の事ハ日本本朝本邦我國と
といふ事字事てハこれいふ然る字世の人乃云

ハミヨカをさまで御園城外とし諸越河舟おしこ
め計まで儒者の中ても御國醜れ有たる人を淺
見安正にの永戸乃栗山潜鋒や土佐の谷重遠ると
其仔細にもやう乃心をへれも思ひ辨へて猥り
下いへを彼國名中國や云々と以ハ好らぬと云
し置友人ヲ希ふへ有さふれとも其王を御國人の
天子と云はてと非説と思ふ人の更にふ々専ら皇
國の學問計りたして我國字ハ身へと知はらば輩
さへ是にハ猶心法かすにいふ事てハ彼國と中國
と云りひらとと有らうへも其王も天子とはけ

比して云はしきとてハ殊に右申を通すハ羅國の
王かとの天子と名告へて謂れハ曾て形或事形也
ハ元々ての事返りくよハ此意味多々わわこ
ら乃記多心得本立てたかぬと道と諂ちかへ
萬れ過り此ら作は則翁の馭戎慨言へ尾張の
鈴木朗り書じ了序に是義一立而群物咸定是義一
不立而衆弊隨生や申てあるら尤ふとて道多學ひ
大和醜と固然やうとせめ人ハとつと心に去免て
妾れぬやうにあはぬ物てハ扱此らり世間の漢
學者流の心得違ふ二三ヶ條申ます其ははは太

宰純り辨道書乃説に日本にハ元来道と云ふと云
候也の證據尔は仁義禮學孝悌の字に和訓あるを
侯元日本ハ元来あるを必和訓有之候和訓ある
は日本に元来此乃事なれ故に候と申白く此ハけ
しうらぬ言ひて此儒者をりててもむく大抵の
膺儒者まゝいりひひきの學者ともとうく漢國
ハ教乃道わは事誠真にかけ自慢をいたして御國
は古くハ教の形つた事な去らてくともく人
をばけれも是も甚乃心得違ひて其故ハから
國て謂ハ仁義孝悌忠信の類すへて人乃行々行

ふと實り有て行ふといし致をばしれ事多致は
夫り常て有る南らハれんの人乃上ハ教の道と云
事ハ入りはせうや元来みらと云道の字ハかゝて
も本ハ往來の上ハの云とてハ彼國の字書の
道の字ハ注ルも道所由道也徐曰道者蹈也人所踏
也と云へて是元来ハ往來と云ふんて行ハ道路
の事ハ夫と人の行ハの上ハ借て云ぬ物てハ又御
國て義知といふ言ハの訣ハ由法知と云ハ路乃字
の意ハ則旅路ハよむち杯云ちと同じと夫に義の
字ハ添ていふをたて添へるも此ハ其義といふ

言ハはまといふ真の字はに御の字の義れ詞てム
其義知と云ことと一道理字字あていものて是も
て當はて居は也夫へからても道乃字を往來に踏
てゆゑ處といひ御國てミちといふ詞も神代卷に
うはゆ御路有と云ふ如く往來せる處は云此名も
ム然れハ古へハ決して人乃行ひの上にとつて申
さともふし其故ハから人の謂ゆる仁義五常ハ如
此ハかやうに名目以作はる教めはてもかく皇國
れ古一人ハ皆つ孫ハ行はく正しかつさる故に別
に教れ道と云事ハ有へ此ははく南いてムこり御

國ハ御國なる處て萬國に勝てて尊貴印の見ゆ
所てム諸越ハ既にもれ多く申白も通て世の初
めうら致して惡き風俗て人のくは行ひ正し
らる甚猥もて有ふる故古の賢き輩々出ははに
く道れ教へりとして元來ハ往來する所は處に
名と人の上へ借て人の道と云物も譬へハ人の
為はしむ事ハ致さハ徑行り如記事故真の大道
往還多ゆくらを以と云乃意て終に人乃上ふも去
やうに成さるものてム又御國て人乃行ひと始る何
業の上にも道と云とに成るハ甚多後世ハ事て

皆から風を移し學んたも此てム志やに依てこく
ら乃記と能考へてと此と御國の古へに教へ道と
云事々無つこのをと亦々尊い處と古記も知れ
心又かひる教の道多作はて人子道といと此ハ其
國乃辱ふ訣も知れりてム何とも自く我國の古
しけしも禁止すへ支惡事も形かつと故に教の道
子立於ん物此ハ今た互に子共々育はて考牙
て毛知れり生質れやかしい子とんむに志と
ハいらを生得たといからぬ子も自からに疑も
嚴ふせ保ふらむ又盜心のある者ハ夫と我次

教る事も所れと盜心のある者ハ誰かぬすも
かゝ教る者んふい教の有ると無いとの差別ハ丁
とこんふも乃てム所とから國に教り有ると誇り
ハ盜といふ者々盜と字と意見せられて嬉
りぬやうふも此儒者々亦々の處ハ氣り付ふんて
か此國は稱上んとして其教は事と言立るハ却
て其質の引倒しとり御國は誇らむとして古へ
に教へといふとりふい立て去のハ却つて御國
の美を顯ハせよめてム返せくも人の上に教と
去物了く惡事改はせぬい為に防たの道具てム

夫故禮記乃坊記に三へぬ孔子の語にも君子之
道嘗則坊與坊民所不足者也と云てあめ惡事休と
る考ふな弟礼ハ教と云坊乃道をハ無用の物てハ
から國に惡事と云は者り多いに依て其名禁ハ道
をも嚴重ハふけれん南らん何ぞからハ辱てハあ
るはいら既不禮記ハし四郊多壘此郷大夫之辱也
と云へぬ孔子の語にも大道之行也謀閔而不興
盜竊乱賊而不作今大道既隱云々城郭溝池以為固
禮義以為紀以正君臣以篤父子以睦兄弟以和夫婦
以設制度ふと云たてハかやうの事ハ心は

んふ猥りハ狂言と放ち多ハ人字誤ハ云と云ハ實
に憎むハ事てハ鈴屋の翁の云は也にハ皇國
の古ハハ言痛き教ハ何ハ知ハハしハ下ハ去ハ
て乱るハ事ハ天の下ハ穩に治ハて天は日
嗣ハや遠長に傳ハて来坐りさとも彼異國の名に
倣ハて去ハハ去ハ上ハハハ優れハ為ハ大道ハハ
ハ實ハ道ハハ故ハ道ハハ事ハハ道ハハ事ハハハ
去ハ道ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
然らぬとのけらとたもハ言舉セハハハハハハハハハ
國乃とこあぬ云ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

も才も何も優也あつた人はいひにてぬ奴らほく
のわが者ぞかへて少り乃事字こやくしく云
あけつて誇はめり如く漢國南とも道ともしと故
小返て道をしれ事成のみ云あへはるり儒者も
く多あしらて皇國立しも道なしと輕しむるよ儒
者のあしらぬハ萬に漢が尊ぶもの思へるハ心
く猶然もあてふん多此方の物知り人此へに是と
あはたらきて彼道てふとある漢國多うらやめて
強てこくにも道あてとあらぬ事共字云つて争ふ
ハ譬へく猿と毛らくと見て毛のふれやや笑ふと

十一

人れ耻て已れも毛ハ何る物字と云て細ふるハ強
て求出てとせて争ふり如しも南交り貴まると
しらぬ癡人の志はにあらすやといふ置れと
とく讀むと味むて道といふ言の有とふいと
別子能心得はり宜いてハ〇扱又仁義孝悌の卓尔
和訓乃南のり御國に道のなると云の證據と
申せりこれらハ余とといへハ笑しい事てハ但し
此方をたらしと思へと漢學者流ハ明辨を云て
やんやと稱るといふを法てはり辨し置れは
いむ其ハ右に段々申屯通て御國の古へ道云て



十一

教る事せかんこれハ古の人ハ其行ひり正しき常
てあつた故てム行ひり正しいと云故に漢國乃謂
ゆめ五倫五常の道は正しい事てムこれら行ひり
正しくハ名らふくとも實物にあらてム誠と云ハ
は五常の五倫はと云類ひハ人々心に具足して常
とあつていぬ時ハ名をつけ去へてあつて
ム元て物に名字付る事ハ彼と此と思ひ紛れり尔
依て附ふものて彼の物てム夫故から人も名を實
の實也とり又ハ大道り廢れて仁義の名あらずも
あつたてム譬へハ器物と云ふ名はこれにては彼

是給きて其ハ器と取よせぬと思ふとも人亦余
とへて様し形とと強ちに云付ると硯は仔細
思ふ處へ益もつてくるやう物事りてきめは
依て名を去ものハ彼のものて實り貴いてムから
國ハ肝心の實物り手薄い小依て後乃世にても正
しからを皇國の躰何つて名のむらば右と一は日
にハわへぬ事てム元てからてハ何事にても名
目と云巨細に煩以得と付てあはむまも既尔天
地に形とりて立あまとも云ふ君臣の道はへ立か
いふあてやこりやにかる程の大変な國とも云

況や余の毛ハ書面に記し女空名計りて立派（其
物ハふ々云ハそ佛經の諸佛芥のやうてム其名は
うてふ躰々ふん何乃かんハし以事うあてはせ
うる然は以漢學者形んと漫ふ其女面乃美し以名
目に計て迷して其心字以多御國乃古へ字も議ひ
むと致さく謂ひ了朽子定規なとてム皇國ハ今と
ても禽獸草木其外乃も此にも名をばけん多ある
も乃成へくらもあは此らも後より名をばけて名
の形をばた前ハ此物々ふなはいと去てくからふ
々又古ハも話こしけ文字ハ渡して後に名所付と

物も有此らも名の自らつ多前ハ其物もふいと強
て去うる然もや此らも目にみへる物故に無のこ
と云へばいり仁義孝悌ふとく捕はへて形ち
此く目にみへぬ物故小強て元来御國ハ心ふら
うはふと去て狂と事と云ひ放して有から鈴屋の
翁乃言ハ了く小く儒者も其名に惑つて名りふけ
はハ其事もふいと思つてとふも甚愚ハ事ハ譬
へるから國てハ人の心乃上に意も云ひ情と云ひ
慾々いふ類ハの種々の名ハあめ事あり御國てハ
只心と計りてく作ら名共ハ無はむかすと實ハ意

も情も慾も有たに違ひなく夫以儒者の去如く於
らく是も漢籍を渡して後に御國の人にハ意も情
も欲もて去りてさう此ら皆御國人に固ある
の心ともの多夫ハ御國ハるや凡てから國
の教と借らぬ他乃國々にも此等ハと云元と不
とくくにはある事て其名こそ異れとも天竺にても
哩儒とて忠の事鳥播迦羅と云ハ孝の事爾底と云
ハ禮の事阿羅他と云ハ義乃事ハと云法て其餘此
國々も准へて知るやよいてハ所字ハれらの類字
も只漢國の擬聖人り獨て始然り了道の様ハ心得

ていふと云ふハ返りて愚かるるといハれは
しむる此をとく考へて太宰とし免漢學者流也云
ふ考心狭支者ハ事字知めりてハ一躰から
國の教と云物ハ急迫に人ハ為ハたけや過て人ハ
小智の限りに甚狭く作て定免さものでハ縣居翁
の云ハれはしたく春を漸くハして長閑なる春
と云て夏も漸にして暑き夏と云る如く天地れ
行りハ凡て漸くして至はる乃自然り或唐人のハ
ふら如く南らん春り立ハ即ち暖に夏り立ハ急に
暑ハば一規は屯是唐人の教ハ天地不背然て急

速尔怙屈有る事と仍て人の打開には才覺有て此
く安々事有り安んじと毛さうハ行われけりもの
天地此を春夏秋冬以漸ふるに背け故たを
いへれ又吾ら翁に去れ曰く小も漢國乃聖人と云
者乃所業以みれば吾ら殺し其國を奪取たる大罪
をハ覆ひ隠して也乃人不信せば是んり為尔己り
身ハ行ひと甚を作り飾り多は強てて人の自は
さか成り城過ふる志ハけち也扱又其教といふも
又己り子孫の人ハ國を奪われん事ハ恐れ又人乃
是を奪はん事字に増えまゝ人の是を奪はん事ハ

恐る故に人のちめへ至限り多過ぎて甚ぬし設
ゆる強事志の然ると天下後世の人其知術と得悟
らして皆是に欺かまへは去ハ誠に愚るは事
也や漢國小ても聖人と去者ハ教の儘に能行はぬ
めんも未聞へき其能行ふ所ハ皆人々自ら備へ
て生じついでる物ふ事ハ知らしし教の功
めと思ふハ甚く愚る事也譬へく幅一丈の溝
を飛越るとしてひやうと教ふハ聖人乃道自ら然
れと毛于萬人の中に一人も教乃如く飛事て死を
皆些に三四尺の溝より飛越る此三四尺ハ教と

受てりも固より誰てもく飛處也や此教と學
小者の中に其徳不依て五六尺位ハさふものも有
りせり夫も法い小彼一尺ハと事ありす又
其五六尺とふと女ものも甚し希ふ事又其餘
ハ亦腹中に飛損して溝中に陷下或も腰脚を傷つ
て元の三四尺字さへも多しこれぬやうに於め者
も多く有如く聖人乃道ヲ知るとして學問をる者多
くハ邪智のまはさして身の行を却て無學の輩小
者者乃て世々ハいといふはし此二翁の説
とて考へ通して擬聖人の道の自然の道と云に

更らぬと以曉るるといて人々の年を計行ぬ
小智慧深から行々のハ春秋に漸尔暖漸に冷成
行り如く常の行乃ある限を三四尺の溝と飛越
め位あるところ天地れ道とも云へ或は管の中
を以て天と見て天以論し井に住む蛙此海以知らぬ
たとへの如く狭く小さく擬聖人の道も自然の道
と心得て夫以記したる書とも仰山もてくや
し居居人多とれハ彼世俗にいふ火打箱の中にて
握飯多焼つとるる如く甚しむかといて○扱
又太宰純り説に凡堯舜の道ハ外に奇異なる道と

立ちの皆左道不て候禮記の王制に執左道以乱政
殺と有之候左道の徒ハ先王の世ハ死刑亦行ハ
はく故ハ其説と口外ハ出セ事ハ亦以テ候と云
り是ハ堯舜ノ道とて外ハ道ハ皆左道也と云
を甚多同陋ナリ事ハ抑外國ノ道ハ堯舜ノ道ハ
其外諸子百家ノ道も俱ニ戒ルハ私ハ制修スル
乃故に實ハ何レ大道いつレ尤道と云差別ハ各
ク其立スルハちよりハ一ニ其餘ハ三ハ左道ハ
佛者よりいハ時ハ佛道ハ大道ハ外ハ内左道ハ
夫レ彼徒の己ウ道とハ多くに道と稱シ儒者ノ外

の道とハ邪道又ハ外道と号ると以ても知ら
ぬ事ハ然レハ凡テ外國の道ハ大道と云ハ左
道と云も皆其道々の上ニ取テ私ノ説テけり云
ハ其證據ハけらに無キ事ハ自ハ其世々ニ用ラ
れりと廢らとめとにて其世々ノ乃大道尤道の差
別も形死に非さまとも是又私ノ事ハ論ハ
し然レ漢國にて儒者カんと推張テ堯舜ノ道
大道と云ハ諸子百家ノ道字ハ左道と申スレ彼國
にてハ世々堯舜ノ道ハ用ル負テ居ル故ノ事
ハ王制乃文字引出して論ヤレとも彼國て有ク

此らの相應ふは事なれども皇國小いことして、更に當らぬ事なれども西土の制度といへども取捨して此方乃事不御用ひなれば、事今いふ限りてハふいて、譬へて天竺の制度を以て漢土に行て漢人を制して、たれも其罪に服をばく有う孔子も吾學殷禮有宋存焉吾學周禮今用之吾徒周といふと以て知へて物と異國の制度を以て擬らうや、せめて甚く不法な更不禮記の文に泥むべし事て、くかい皇國の道よりみれば擬聖人の教諸子百家、みる左道なれば論ずし然るも膺儒者は、披見識

して何事不し堯舜の道周代の定とて、其外なるは異端邪説と号けて合せて皇國の道なれば、左道といへば一向に廢て、あむはうと屯るは、返りくくも周陋な事、是ハ漢籍とも不、必則古昔稱先王杯の類、思ふてのとして有らば、此ハ漢國にての事なれば皇國の人にして皇國の正し、或稱へるは、道なれば、叶ふべければ、抑道の躰とせし處ハ、唯君ハ君として下は、惠ミ臣ハ臣として君に忠を盡し、親ハ子多慈し、子ハ親に孝行を致し、夫婦兄弟長幼朋友夫々に、はつあるべきもの正し、處とば

して道と云へし物に是ハ人々皆かりてハ
可ハぬとて皇産靈神の御靈に依て生れりらふ
し多誰も能辨へしと云ふ然れ共其真乃道ハ正
いと云ハ獨皇國れとのとて諸蕃國ハ何うてはか
い其中にも漢土と薄惡れ國風ハ何故に湯武南と
云もれ共出て法其大本とる君臣の道と云へ破
て君を弑して國を奪ひ猶又弑虐の罪と遁れり
為小天命杯去事取返り亦く其道を修飾して君
臣之道と云へ猶も嚴重ル作て添て種々道乃事々
書籍小記し記しく制度を立てる但し其れハ

君を弑し國を奪ふ程の奸智ある者とも立り
制度形了故其文面ハよく立流に行届てみよめ或
漢籍に歴觀自古巨盜故臣強叛猾逆率多高才薄學
之士也と申ふハ漢人の語トして聞くと云はれり
事てハ扱一旦已れり奪取して又人に奪はれはし
又様にとて智慧の限を振つて作たは道ハ何故
小残る處もなき如く至て尤らしと書籍ハ記
しあれ共其書ハ無用に也傳ハる乃みて守るも
のふと此を其立り了制度と云も實ハ初迄ハ已ま
りやかり了道て何はもの成其破りぬはものり

又人に行うはせはいとて立ぬる制度もは故に
人々用ひぬので俗乃諺に盛衰りこなしぬりや去
如く南は故に此は用ひはるや尤て公今世乃人に
ても自ら放蕩階弱にして人の不身持と直さうと
構へ尤らしき意見は云とて誰り其を事字
用ひぬりて孔子も其身不正雖令不徒といふも
此意であらう又不能正其身如正人何とも申はて
公叔今上尔堂籍は用ひ給ふ處は其便利の處と
摘取て少く御用ひぬりたるこの事は是れ彼の
人多以て言は廢せと云類であらふ然ると儒小

二
三

のち拘泥しつて非心得多致し其儒道は小皆か
ら皇國に用ひぬりと思ふハ何事、撫我則后君也
雖ふと去類の穢らハし又言ハ皇國にてハ聞はへ
忌々しき事は又漢風のと成り少くハ御用ひは
はく多みて堯舜の道てなくハ治らぬ杯去ハ甚以
て雅の事は皇國も御用ひぬりたる處は彼國の定
めの百分の一ふも思はぬ事た若悉く御用ひは
るくとふらハはういハる去り是れ我人て有り
於此ハ然も有ハ此事亦れとも皇國の人にしてハ
漢國の事と御用ひははるくと誇りれハ余に

三
四

如何しきとて又一筋に擬聖人の道と行へつと
思ふ人ハ行はても見らる礼記の内則と云
ミれそ彼一丈の溝ヲ飛越ると云教は類にて實ハ
生ハ心地も屯田と思はれはほつて彼教
の如ク行ふ者も世々一人もあると云ふ然
るに元々の行ひ一としに堯舜乃道に効はつと云
ふ人も其も混れる或左道に人又もしも彼教れ
儘小行をうとしてを差支る有て迎もて支ぬとて
ハ或人傍に在て云下は然云は汝ハ我意と立様と
ての固陋と有り堯舜ハ道字行ふとて何とて其

所為は皆行ハしと事有る只五常と守り五倫
以正しとせうとのこの事と云拙者の云ふも前
にも云如く其名目こぢハ無はつたれとも實物も
有て是則堯舜ハ道の渡り未はる以前より固有の
道で今人々の行ふ所を更ハ堯舜ハ道乃功て有い
其名目の事共以置ても禮學容飾或ハ君臣位と更
ふむとの類堯舜ハ道字強て行ハると云へ此ら
ハ此らの事行ハつと云め者ハ左道の惡者ルし
て且ハ顛狂ハ事論ふしてハ叔堯舜ハ道と一筋
ハ取立く大道と云ハ皇國に今行をめぐ所と堯

辨乃道に違ふ故に左道と云は是字警へていへば
人乃家に寄食していぬ居候り折節主人小代つ
て家事とも取敗ひ形やせり後々ハ已り寄食人
のふとと妾はて主人以指て寄食人有りと言
るり如く甚と笑し此事て堯舜の道も大道と云
ひ皇國固有の道は左道と云意ハ乃居候乃如し
ハ六國乃道は皇國に用ひぬまふ此意なり然る
に儒者らにいふ處字道理やたもひ信すは人々同
く皇國乃道と左道と云ふ云ふハ寄食人々本
居候字わきま吾こは主人たと云と聞て實に主

人々と思ひいふとく殊にたふしい吾徒も
みれも主人と寄食人との差いといふ分て誰
し誤るといふ事てふされ皇國の道もこれ
に堯舜の道も始先諸子百家みな左道なる事論な
しと處字執左道以乱政殺と禮記に見へて然る徒
ハ死刑に行はるるを究らしこく純くして今
少し委しく王制を引たりしや其の引出てハ身の
勝手にあし此故有る已まハ油具も引出て其好
む處の王制に據てたりてハ扱其文に折言破律乱
名改作執左道以乱政殺と有て此らの罪を犯すも

の以不曉とて家語孔子も申す又同く
王制に行偽而堅言偽而辨學非而博順非而澤以疑
衆殺と云ふも純みふ安んして犯して居る其は
はつ折言といふも古へとてしは類破律といは漢國
多る蕃國と云へき御定かると中華と稱ふ於て乱
名と云へ京と勝國信濃成信陽と云ふとひ又改作
とて何事にも漢風にせんとも事ふも云へ左
道多執事改と乱はといふハ風俗と変し國家子危
くせうと謀るもので皇國の御制度にては亦乃罪
名字謀及やいふ例て賊盜律に謀及及大逆者皆斬

とていふ純り心ハ漢國の人て何れ共躰
皇國の人に混れハ無れハ皇國ハ律令不違背も
めは然れハ皇國乃御制にて禮記の制不て
其罪と遁れうも屯るに陳とへれ由りく率にして
罪以免れと云へたも乃抑儒者と云者ハ
とてまた亦も義理に昧も我國乃事不疎いと云も實
に奇怪と云へき者てハ世の人の罪以正はし
て引出さば王制と以て却て已れり罪以己と正し
とるハ彼謂ゆ了吾ら室に入て吾ら身と執り吾ら
刺すや々云類とも云へ或事是又彼謂ゆ天余

の然らざる處(可ら)○純は(申)小(偏)屈(自)
る儒者(ハ)諸子(百家)以(異)端(邪)説(と)名(つ)けて(其)書(と)
讀(は)め(故)尔(其)道(と)志(は)一(概)不(取)一(た)所(有)之(様)
に(存)候(去)々(畢)竟(諸)子(百)家(も)佛(道)も(神)道(も)堯(舜)の
道(以)載(さ)し(て)世(不)立(と)能(を)し(林)去(ぬ)も(實)不(大)笑
不(堪)は(事)有(先)尔(も)浮(屠)氏(の)事(と)云(た)處(に)彼(輩)
ら(奴)僕(字)使(ふ)ハ(君)臣(乃)道(身)子(以)養(ふ)ハ(父)子(乃)道
又(法)兄(法)弟(有)る(兄)弟(の)道(衆)僧(を)和(合)して(學)問
せ(る)ハ(朋)友(の)道(は)多(佛)事(に)某(ハ)儀(式)あ(は)ら(禮)
梵(唄)聲(明)く(歌)鐘(磬)螺(鼓)を(鳴)て(ハ)樂(にて)釋(氏)も(禮)

樂(を)捨(て)ハ(其)道(行)は(ま)も(儒)者(より)見(れ)ハ(今)以(僧)
侶(ハ)皆(先)王(の)道(を)受(る)に(て)候(杯)や(申)此(固)陋(は)
多(云)ハ(之)様(不)し(て)公(是)ら(も)皆(聖)人(の)道(を)借(ら)は
他(乃)國(く)も(某)も(不)道(ハ)あ(は)と(去)事(の)證(據)は
あ(た)れ(共)何(と)して(純)々(太)如(事)不(當)ら(ず)て(此)ハ
人(々)常(の)行(ひ)已(う)尊(ぶ)聖(人)の)書(に)記(し)ら(は)事(共)
と(似)多(す)と(の)あ(る)を(み)斯(思)つ(ま)も(の)て(此)胸(中)
の)狭(を)思(ひ)計(ら)れ(る)て(ハ)少(人)似(さ)る(處)あ(は)ら
以(て)斯(く)も(う)ち(ら)ハ(佛)者(を)て(も)諸(子)百(家)何(れ)の
道(と)云(す)其(外)以(道)と(字)指(て)さ(う)云(へ)此(も)の)て

△其故ハ諸子百家の道何事も五常と廢て君父と
弑し盜賊をせしむと教へある道ハ自ら事ゆへに何
處も同じ筈乃事て△猶其道々此書のみて知るる
△其内擬聖へ乃教のみをうへへある立派に△
△あそげせしむ其行ひの趾についで是をこれと
右に段々申す通りの訣に△は味て是を△聖人下君
字弑し國と盜むとを教るれ道と△も此△かや
うの△も辨んで諸道何にもら△聖人の道と載
り△の世に立△と△ハ△と様の強言△△
警へ△小兒△我家乃上にて△月△と△り△の

甚稚れ事て△月△至ら△の隈△△萬國と御照し南
はれ△物と我家計りの月と思ふら△し△純り
説△是△同し理て△天地乃間の萬國漢土に言通
△せ△△國何程△△△△聖人の化流沙の西△
至ら△と△言△ある萬國上古△の△人固△△活
物て産靈神の御靈△依て自然に男女乃交合を始
免惣て乃事と知て其通わに爲し△△△もの△
然る△純り如く△△△聖人道△△作ら△前△萬國
乃人生れ△△△△に△木偶土壘人乃如く動△△
△△に△△△者と思△△△△△△小兒の如

く多ハあるはいら扱又世亦漢學に迷はざる者と
乞ハ彼國の書をも中華の萬國の師ハ其杯と我
人の挾死心より去出ハ漫言以聞ていらにし然
る事ヤ心得漢國の教ト非はれり諸事字句し得ぬ
事ト一向に思ハハ甚しク愚カテ漢國は教ト云ハ
のハ吾皇國ハ正しク上よりこれを知れ白為ト以
悉々しく教へたるものハ此事ハ湯淺常山氏説ル
聖人の教トハ不物を名目立テ弟子とも々固ク
守らせ大切ルハ處ハ大抵ハ只今此子とも毛に禮
ト教ハ如く飯ハ喰ヒ不き飯ものやと去不同し

はハ道理精微於めり曾て覺ハぬ於ても申ハ
絶ト同流乃學者亦もかやう面白キ見解の人モ
有は也然る以強テ堯舜乃教ト非されり道子ハ知
らざると去ハ例の文辭に迷ハは痴心ハ譬ハ爰
ル衣冠正しキ装に人ト又外ハ痴人ト一人あり
其衣冠正しき人ト出テ伴の痴人ト向テ言ハハ
汝空腹に至はぬハ則當テ食ヲ喰フ宜ラ
ラト教ハ處ハ痴人ト聞テ大死に悦ビ此ハ悉ク
人ハ此人の教にあらやハ吾ハ飢テ死ハ死處テ
あつと太しく尊ル思ふ如ク是ハ痴人あり

故て空腹に至れば當歳乃小兒といへとも母の
懐を開いて乳を探してはらされれば教を受て
とも知へずといへ必知てぬもれば此衣冠正し
ふ人とも擬聖人といへ書物に譬へ痴人と云へ純
と始め其道を奉ずる輩と云のて先亦も加茂の
翁の説を引て申す如く春秋の漸くに暖に漸
今に成行亦く引て聖人の教の如く急速に迫りて
教へずとも人たは者へ誰り漸くに其為へあはけ
を成せらす居はせう今の世も稚立ちり書は讀
て文義も曉は迫りいらはは内讀書を廢た或は又

更し書は讀し事もふ者も時至れば相應に五常
五倫の道をも行つて世に立行をも思ふへたて
ム或人申すも今の世學問をせぬ人も相應に道に
外れざる事もふあやうに行ふも聖人の道渡り
てり予有余年行はれて世に徧満したるり故に
是儒學の功にあらずして何れ馬鹿其ハ儒者の
常談て一通でも誰かさう思ふやうふれとも深く
思へぬ僻言と儒の道は渡り来らさぬ古へ人乃所
行いと正しく自ら道に叶はて居はへ何故であら
う是知をしく叶はぬ事ハ固きり知をいぬる事

有いり或人又云然らハ學問ハ廢よりの事ハ拙
者去學ふへししく世ふくまき生れあけらの真心
毛てする小學問せもとも何事ハあらんぞ云人も
あきと此ハ乃子路と云ひ人乃申さる言を同
しく心地よけ不聞れともけよてむ其は法
誰ハ身に付おる五倫五常は道ハ學んむとも知て
居らう其身の本ハ親先祖乃事と志めにハ學
問らうてしえ事何ふハ人として人の大本ハ
何なるも乃とも知らず居んハ口惜れ事ふとハ
勉勵をて學ふへ死事勿論く然れハ漢國乃學

ハはつ後ふはハしては古へも學んで身の本と
知り又と古の正しき御代の意を辨へ其真心誠
正しと固くして後漢國の事とも學んで古學の奴
に使ふへ我もれてハ我り翁もかり教られゆしこ
猶いハ禽獸小法ハ鳥小反哺の孝アリ鷹に兄弟
の義アリあわ狼に父子乃親あり又虫にも蜂蟻形と
小ハ君臣乃義アリ杯去事共乃漢藉にも何とま
と見へてある此等も堯舜ハ道の及んと云者て
有つら人もして堯舜ハ教に非されし道子あらせ
と云の國に對し先祖小對し禽獸にも答つたる

不法者と云ふし純れと則是く○扱又前に申の
は純の説の堯舜の道不非は世に立て能をす
候とある其文の續記に於れ中華は古代も日本
の今れ世も天下を以て治る道乃道尔て治り候と
く諸子百家及び或不佛道或は神道以好む其國
家の乱るく端にて譬へく病か未人の妄に吐下攻
撃の藥と服をるく如くふるへく候とある此中華
の古代と限けて云ふは甚笑しへもく堯舜の道ハ
西土尔てハ古代尔計で益有て後代尔ハ益る道
て有り夫と大中至正の道とは何事と彼頭かく

して尾多出しさる譬への如く純爰小至て大なる
る尻尾を出したてふ夫に付て思ひ出したる笑し候
談ある或山寺ふのふろよりと云事冬冬年
久しく庵主と成て住ふ老法師有る處り朝夕
佛に仕へる事いと田をやりて讀經の聲撞木の音
をゆる事南く懈怠形いに依て聞傳ふめん毎にい
みしと尊貴聖と云て甚やんふとふと者に譽尊
んこと云事て然る此法し或夏の夕法方佛小向
い讀經して居る處り谷間より吹上ぬ風乃いと
心地と云涼し氣不覺へてとろ不眠々と催し手

に撞来を待たぬまゝ我を思ひて打倒れ其處に寝
て志はたして近れ邊りの者共夫はと知らず法師
が物やひせうや申て打群て来てとふれはいと大
かめ狸の尾を出して衣を着た儘ち伏て居る
に依て人々始めて此法師の老狸と有たはとを知
ぬと古物語もある純も是を同日乃談や云へる甚
笑し此事を公亮舜の道と功あは様に去るや計り
やれ共さき々に彼國の世々の聖人此道と古法用
ひて治はれし事有く乱かはしれは思へる古今
に涉つて大中至正の道と受もはるはいとひり孫

こととへる然も有る事と未委しく考へ通は
れれども漢土の世々に五十年とく治はれし事
事かあるを以と思ふさそれ漢土の古代の治は
つこと云も覺束る況て其後の事ハ上も段々去
如くなるもの字今何國も用ひる事とも何の益も
何らう強て歡か好む時ハ只國家の乱る端を譬
へる病有る人の喜ぶ吐下攻撃乃藥と服を了る
如く更も益なり此のみに非も終に廢人とれり
あり心す一死して公叔純又樂の事ふとも委細
に辨へしはけし申たむと彼々著しは和讀要

領かゝるに皇國の音聲と侏離缺舌と聞かぬ漢國の
音聲字正しいと云ふは如灰僻耳てハ何事も覺は
らぬ事てハ禮記に樂記にも知聲不知音者禽獸
是也とも又不知聲者不可與言音不知音者不可言
樂ともあめ此人早くとり詩文の師と稱らるると云
て厲と云ふ不も有て詩と賦と漢文と書事以て
得ぬる處ハ皆人も知さる如く實に一つの門戸に
成白てハ然れとも其よしも道小叶ひぬと思
ふといふ愚ふ事と禮記の樂記にも記問樂不足
以為人師といひまぬ外の漢籍にも記問文章不足

以為人師以所學外也とも云てある詩文の如き技
藝は能得ぬれハとして何て有り此ハ俗間に時行歌
と作り或ハ豊後節の文句多作はると業やする者
杯と同等の事なく更に國用不益を以てハ然ら
ぬ何と道の師とすは程乃事有り是らの事少し
心と用たるとから誰しの人にも出来ぬ事乃事
技藝不名あるを心あめ人の耻とせし事てハ扱
此人詩文成於ては然のこゝしく譽立る程の事
ハる元祿寛保の間ハ未だ學問の道大いに開け
たる時代な故に純杯も識者ハ頭數には入りた

是共今や學問の道大いにいひけられたる其眼を以て渠
らり唱へたる古學より古説をも多みるに甚片腹い
ふに杜撰乃と多く未しきものて今乃西にも純
才なる者より渠等より學風と愛慕する者もはる有き
と是を以前高名なりし事ハ世に流れ来りて未だ
其説乃雅に悟らざる故也事て今此後漸くに彼
より學風乃廢を行く眼前の事て今乃俗に已
儒者よりらとて實にも道字尋ねんものせもせと
其身持放蕩階弱にして詩文字の之主と致し其博
覽多識と呼ばれて誇らつとこれハ構へみこす人の

子弟よりへる其當に引入れ返はる道以て律義
より學者を以て識せはるかと去て片羽者に如く
去ふし世間の風儀を以て去ふはれ始皇より居
からハ兎尔もと思ふ計て去は儒者とも此世も多
去ハ皆純り輩乃流しはる惡學風てハ譬いハ不
優れい人小ても稀くハ誤り有にハあらは
る字純ハ第一ハ大本立はる學問故に非事乃多
いてハ又經濟れと字去はにも不經れと云ふ
らる孔子も不在其位不謀其政とも有る純り黨乃
儒者も經濟ハ去ハ天下字玩ハ意ありや申て

生涯いづらん者もあらず宜ふとて又宋儒の
學と唱ふる儒者も聖人此旨を違はさといひ口
と極めて呵はふふも其流の筆も大概ハ純々
如友偽儒にてハかゝる春秋の意を守りて我國以尊
々山崎闇齋淺見綱齋ふとの云ふ説にハ甚も勇健
しく猛く雄くし皇國魂の言も多いてハ純々學
風く此らと表裏て若や昔元の世祖々如く皇朝子
襲ひ奉らうとて西戎よて攻来ぬ事も有う然らむ
中華の天子に射向むん事東夷としてある由し其
事や於といひふれて歸命投化と心得申と脱戎て

西戎の膝下に屈して國を賣うとせらば其様の儒
者て有うと思ふ斯る者多ハ佛者も師子身中虫
と号けていと多く憎むハ此物ハ仁王經と云
佛書ハ乃是住持護三寶者轉更滅破三寶如師子心
中虫自食師子非外道也と云へば純々ハ此虫に
似たせて人學ハさきハ道ヲ知らず杯去言も其れ
々も學文も純々如く學んては丈に國乃害と成事
了更に學文も農夫山賤乃類ハ一向ハ我國の尊く
有難き物れ事々心得居て外ハ異念勿れ物々ハ
或漢籍ハ偽儒奔競營名不如保細民之廉耻と云ふ

巧るハ然ルことハ譬へん汗牛充棟の書ハ更しも
 云は十三經二十一史諸子百家古今小説の書五
 十餘卷の佛經と南諸誦し有うとも國忠ハ志南
 大本立は學者ハ書淫蠹魚の類ハて農夫山賤
 にもははらるる必れはもれと云へし或人の申ハ辨
 道書の文意ハ小角復友人書中ハ語以徧次し為
 物親族正名ハ伊藤氏ハ釋親考と取て和讀要領ハ
 羽倉氏ハ讀書指要と採ふのいも申す又或書にも
 聖學問答にハ西小角ハ説子生剝に云ぬと云は
 多しと云甚く呵て又或書にも辨道書の中に釋氏

の事と云ふと増穂大和ハ八部書乃説以編次し
 のこと云はしむ實然もあは井澤蟠龍ハ云
 是如く彼信天翁と云ふ鳥ハ類にして純は學者の
 風上にハ置はしむ穢らへしむたの者ハ其ハ
 蟠龍ハ説ハ他乃説多以て我説として誇めし志士
 のあへてなきと云弊習又歎くへし依て思フに
 丹鉛總録ハ信天翁ハ鳥乃名冥中に有り其巢と食
 ハ共自ら取事能くハ巢鷹の取て落せるものあま
 ハひろいて食へし蘭廷瑞ハ詩ハ荷錢苜蓿綠江空
 啖鯉含鰾淺草中波ハ魚鴈貪未飽何曾餓死信天翁

と有他け説字我説と屯る者ハ此の信天翁亦相似
右と申す是ヶ付て已また謂ふに此風の學者俗
間に多々有りのなき共然る者を決て學文も踏卜
したる事々々語相て見ると以て未しく心も浅々し
死者其者共り人乃よれ説以盗々々已り説ふ
と誇り他人を談ふ聞ふ自らの説々人れ説々の
差別も能聞分つて譬牙は雞鼠り磐石の傍尔在る
我は此石字負て来たると云い々如く大概は水死
立て死々分る物で心ある人身皆笑ふ事て公其上
にも笑しいと爰亦聞ふ事と彼處尔語りかしこ

小のつとを此處不談て其さは腹懸て晩母り人
の間言字太あゆくら如々何り事知り貞に立廻る
者もゆ々有るり々如う乃考は俗尔ハ才子と云一
躰本に養ふ處亦其もの故亦其よ或説以語り死々
せむる人字も既く忘れて又其人亦對して其支々
多るると我物にしてとことかゆしん談ゆとも有は
とにかふに此癖ハ心汚穢を業ふるハ言ふ不及ハ
と甚愚ある事てふらるる死々死心死で南から
已道得ふて氣に一向に孔子と信し候孔子も我
小印可して下さるると申ふハ餘りに押のはる

事てん純く如死者に印可をばやうが孔子よりハ
更に好人とハ云く此の因い是ハ或漢籍に欲讐偽者
必假真と云ふる如く皆愚人を誘ハふとてのこは
たて事ハ實に孔子以信せし事此らハ其教を大に
守るべき事不ば更尔其意とハ異ルして今以世
の賊僧ともの己り道の五戒をハ此らにハ此事
缺ハをして漫て不釋迦を尊み貞とると同じ事南
て憎むべしと云ふ

西籍概論大尾

愚心論了て其ら則然或不知其入

